大バカ者。

一郎太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大バカ者。

【Ｎコード】
Ｎ３６５８Ｅ

【作者名】
一郎太

【あらすじ】
俺はストリートミュージシャン。一人でも二人でも、俺の歌を聞いてくれるなら歌い続けていきたい。親父の他界、彼女との別れ、立ちはだかる現実、全てを受け入れて歌い続けていく・・・。

No. 1

「お前は大バカ者だ。」

この言葉は、今は亡き親父が、よく酔っ払って俺に言った言葉。
そう――俺は大バカ者。ただそれだけ。

今俺は深夜の商店街でギターを鳴らしている。
全ての店のシャッターは閉まり、等間隔の電灯だけが寂しく光る場所。
そこで歌っている。

週末の土曜日、毎週電車でここに来る。
深夜の通りは道行く人が少なく、歩いていても不良や酔っ払いばかりだ。
そいつらは俺が歌っている最中も平気で絡んでくる。
金を盗んだり、暴力を振ってきたり、散々な事をされてきた。
だけど、今も俺は懲りもせず歌い続けている。

「よし、今日も始めるか。」
俺はいつものようにギターを取り出した。

――ある人が足を止めた。
その人はいつものように歌っている俺の前に腰掛ける。
俺が歌い終わると、その人はパチパチと惜しみない拍手をしてくれた。

「相変わらずうまいね。」
「毎週毎週どうもです。」
その人――彼はこの商店街で出会った大切な歌仲間――ひろゆきさんだ。

もう半年以上も前の事だ。
俺がこの町へ来た理由――すべての始まりは俺が高一の頃に遡る。
その一番最初の理由は、
「有名になりたい」。
ただそれだけ。
言葉を飾らずにいうと、
色んな人達の前でキャーキャー言われる存在になりたい。
テレビにたくさん出たい。
そんな単純な理由だ。
でもそれだけなら、何も音楽やストリートにこだわる必要はない。
アイドルや俳優や芸人とかその他色々な道があるだろう。
実際高一の頃の俺だったら、アイドルにでも俳優にでも芸人にでもなって
「有名にな」っていただろう。
しかし、高二、高三になるにつれ、徐々にあるもう一つのひそかな思いが芽生え始める。

俺は自分の音楽に才能があると信じていた。そしてその音楽達を本気で愛していた。――いや、これは今も愛しているだ。
自分が作ってきた音楽達を無駄にしたくなかった。
そして自分の音楽を色んな人に聞かせたい。

というもう一つのひそかな思い。
その二つの思いが重なったのが、こうしてストリートで歌っている今の俺に繋がったのだろう。

俺のストリートへの憧れ――

高三の文化祭で、一人でステージに立って歌った事がある。
その時の俺の歌を聞いた大半の生徒達の反応は冷たいものだった。
さっきまでキャーキャー騒いでいた女子達は、俺が歌いだすと、徐々にみんな外に出ていった。
さっきまで大声で有名な曲を合唱していた男子達は
「なんだよ暗い歌だなぁ」
「うわ、何コイツ。まじ空気読めよ～」
とか散々文句ばっか言って帰って行く。
一曲目が終わった時残っていた生徒はたった3人だけだった。
だけど俺は何一つ悲しくなかった。

何でかっていうとその3人――たった3人ではあるが、俺が一曲歌い終わっても残ってくれた3人だし、こんな俺に向かって惜しみない拍手をしてくれた。
ただそれだけで胸の奥で込み上げてくる何かがあったのだ。

その時俺はステージの上で決心した。

いきなり何百人の前で歌ったって、俺の歌を受け入れてくれない人達はイヤな顔をして帰るだろう。だけど、ストリートだと俺の歌に何か心に響く物があって足を止めてくれた人だけが、ちゃんと聞いてくれる。そして何より、一人でも二人でも、聞き終わった後その

人が心から拍手をしてくれる。
ただそれだけで嬉しい気持ちになる。
そしていつか、そんな積み重ねで、何百人の前で歌を歌えるようになる。
いや、絶対になってやる。

その時の俺の決意は揺るぎないものだった。

高三の夏に、この町へ引っ越した。
親からは、絶対に止めなさいと何度も止められた。
だけど、夏休みにこっそりとこの町に行き、そこに住んでる先輩の仲介で、小さなアパートの１Ｒに住む事になった。
そして引っ越す前日に、高校に退学届けを出した。
親には全て秘密にして話は進行した。
小さな鞄にその日分の荷物だけ詰めて、深夜にこっそり家を出た。
その前日、俺のそんな気配を悟った親父は、本気で俺を怒鳴り散らした。俺と親父は殴り合いの大ゲンカをして、親父は頭を強く打って倒れた。

親父が亡くなったのは、俺が引っ越した三日後の事だった。

No．1（後書き）

後書きまで見て下さってありがとうございます。指摘、批判、何でもいいので思った事があったら、感想下さい。

No. 2

三曲目を歌い終わり、ひろゆきさんに礼をする。
ひろゆきさんはいつまでも拍手をやめない。

「ヒロシみたいに才能があればなぁ。」
ヒロシとは俺の名前。

「いや、何言ってるんすか。ひろゆきさんみたいになりたいって俺しょっちゅう思いますよ。」

ひろゆきさんは俺がこの町に引っ越してはじめて深夜の商店街に出た時に出会った人だ。
今俺が歌っている場所。この場所でひろゆきさんは歌っていた。さっき俺は自分の音楽に才能があると信じていた。
と過去形で述べた理由。それはひろゆきさんとの出会いにあった――

親父の葬式には何百人もの人が来てくれた。
喪服を着た人達が、亡くなった親父の前で深く瞳を閉じて、手を合わせる。

親父という身近な存在――俺はこんなに親父が色んな人から愛されている事を今まで知らなかった。
親父の墓の前に立つ時、親父が最期に言ったあの言葉が俺の頭をよぎる――

「お前は大バカ者だ。」

はじめてひろゆきさんを見た時――それは俺が精神的に酷く病んでる時であった。

ひろゆきさんが大声で声を嗄らして歌っていたあの曲――

今でも覚えている。
長渕剛の
「乾杯」。

衝撃的だった・・・
あの頃はただひろゆきさんの歌っている
「乾杯」に酔いしれるだけで全てを忘れる事ができた。
あの衝撃は何だったんだろうか？
今歳を重ねた俺が導き出した答え。

音楽に対する姿勢――それが俺とは全く違う所にあるのではないだろうか。

さっき俺は
「乾杯」を
「歌っている」と表現したが、実はそんな容易いくくりでは表現しきれない，何か，があったのだ。

それが，才能，というものではないだろうか？

普段は優しくて気さくなひろゆきさんが歌っている時は、俺にはな

い力を感じる。その力が何なのかは今でも分からない。
そんなひろゆきさんが歌っていると、道行く人は必ず足を止める。
そして俺と同じようにひろゆきさんの奏でる歌に酔いしれる――

気さくなひろゆきさんとは同じストリート仲間という事もあり、すぐに仲良くなった。
何気ない日常を面白おかしく語るひろゆきさんに、俺の心も随分と助けられたようだ。
しかし、そんなひろゆきさんに一度だけ聞いてはいけない事を聞いた事がある。今でも後悔している。
それ以来、俺とひろゆきさんの間には見えない深い溝ができてしまった。

いつもの夜の商店街の何気ない会話――

「ひろゆきさんが歌いだすと、一気にお客さんが集まって。本当に凄いなぁ。」
「まぁ暇つぶしじゃね？」
「いえいえ、あれはひろゆきさんのオーラが引き寄せてるんですよ。」
「ったく、何言ってんだか。」

「嬉しくないんですか？」

「そんな事はないよ。すっごく嬉しいよ。」
ひろゆきさんは素敵な笑顔でこっちを振り向く。

「・・・その、ひろゆきさん？」

「ん？　何だよヒロシ、勿体振った顔して。」

「一つ聞いていいですか？」

「あ～何？」

「その・・・なんでひろゆきさんはデビューの話とか来ないんですか？」

「・・・。」

「いや・・。その・・・いつもお客さんたくさん来てるし、この町でも結構有名じゃないですか？　そろそろそういう話が来てもおかしくない・・」

「ヒロシ。」

「え・・・。何ですか？」

「デビューって簡単にいうけどな、俺みたいな人間じゃ到底掴む事のできない絵空事なんだよ。」

「そんな・・・。」

「ヒロシ・・・。　俺はもう歳を取り過ぎた。色んな世界も知ってしまったし、今俺が歌を歌っている理由なんてたいしたことないんだよ。それに、デビューなんて考えた事、俺は一度もない。」

「ひろゆき・・・さん・・」

寂しそうな顔でひろゆきさんは言った。あの顔はきっと僕には言えない何かがある・・・
そんな気がした。

「でもな・・。　ヒロシはまだ諦めんなよ。」

「え・・・？」

「お前は若いし、夢もロマンもある。　お前の場合、やっぱりプロの歌手になる事なんだろ？」

「は、はい。」

「お前には音楽の才能がある。人を引き寄せる力もな。だから、頑張れよ！」
そう言ってひろゆきさんは静かに歩き出す。

「あ・・・ひろゆきさん、僕頑張ります！」
俺は大きな声でそう叫んだ――

それ以来、ひろゆきさんがこの商店街で歌っている姿を見た事は一度もない。
ギターケースだけ持って俺の歌を何曲か聞いた後、トボトボと歩きだし、夜の暗闇へと姿を消す。
その寂しげな背中だけが、俺の脳裏に焼き付いている――

No. 3

酔っ払い女は俺の前で足を止める。

「う～ん、アンタ何してんの？」

俺はギターケースからギターを取り出し、いつものように歌う。すると、

「だぁ、かぁ、らぁ～」

ギターを弾いている俺はそのまま倒れ込むように接近してくる。

「ちょっと何するんですか！？」

彼女は俺をなまめかしい手つきで抱きしめてきた。

たまにいるこういう厄介な奴・・・

「離して下さい！」

「え～何か言った？」

この女、かなり酔ってるみたいだ。

酒と香水の匂いが物凄くきつい。

今日はもう引き上げるか・・・

俺は無言でその場を去ろうとする。

「ちょっと、そこ座るから聞かせなさいよ～。」
振り向くと彼女は路上でオッサン座りになっていた。
「そうね～何かノリノリな曲お願い。」
両手をフラフラしながらそう言う。
「じゃあ・・・いつもやってるやつです。」
路上で必ず一曲目に歌ってる曲・・・。世の中の疲れた人達に送る応援歌。
ギターをジャラーンと弾くと自然に次のメロディーが頭には浮かぶ。
「あ～きらぁめ～んな～　生～きてゆこうで～　枯れない花～　咲かす～」
「・・・。」
彼女は目を閉じている。
眠っているようにも見えるほど動かない。
ジャジャン・・・と曲が終わった。
「あの・・・どうでしたか・・・？」
彼女は目を開け、ニヤッと笑う。
「ちょっとね・・・背伸びしてるわね・・・。」

グサッとナイフが胸に刺さる。

「そ・・・そうですか・・・。」

「う～ん、なんかビミョー。」

俺は右手拳をぐっと強く握り、怒りを抑えた。

「あ～ゴメンね。　うん、でもいい曲だよ。若者らしいからね。」

全く説得力がない。

「あの・・・あと一曲聞いて下さい。」

「あ～何曲でも聞いてやるさ。　歌ってる時の君、カッコイイからさ。」

「・・・。」

そこまでストレートに言われると少し照れてしまう。

俺は心を落ち着かせる。

「次の曲はラブソングです。」

「へぇ～。」

彼女はだいぶ酔いが覚めた表情で見つめる。そんな彼女からは２０代後半の女性特有の美しさを感じる。

今ここで一曲作れそうなくらい本当の彼女は奥が深い・・・のかもしれない。

ジャララーンと曲を奏でていく。この曲を歌うと必ず頭の中に高校の頃付き合っていた彼女との思い出が蘇ってくる。
思えばたった一年しか続かなかったあまりに脆い二人の関係・・・
それでも恋人として心、体すべてを許しあった二人だ。

歌い終わった俺は一礼をして、ギターを片付けた。

「う～～ん、こっちの方が全然素敵ね。」

彼女はそう言って立ち上がった。

「もう、すっかり酔いが覚めたわね。　君、頑張ってね。」

彼女が最後に振り向いた笑顔は素敵だった。

俺は一人でも二人でもその人の前で歌い続けていく・・・あらためてそう確信した。

No．3（後書き）

ご愛読ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3658e/

大バカ者。

2010年12月16日02時59分発行